

慶州皇南大塚南墳より出土した新羅鸚鵡杯

| | |
|-------|---|
| 著者 | 金 鍾佑, 大谷 育恵(訳) |
| 著者別表示 | KIM Jong-woo, OTANI Ikue [trans.] |
| 雑誌名 | 金大考古 |
| 号 | 81 |
| ページ | 59-69 |
| 発行年 | 2022-12-26 |
| URL | http://doi.org/10.24517/00069153 |



慶州皇南大塚南墳より出土した

新羅鸚鵡杯

キム ジョンウ
金鍾佑 (国立金海博物館)

I. はじめに

慶州皇南大塚は王陵級の積石墓で、2基を連結築造した瓢形墳である。夫婦合葬墓である皇南大塚は夫の墓である南墳が先に築造され、北墳が南墳に付け加えて後で築造された。皇南大塚南墳の築造時期については、研究者間で様々な多くの意見がある。一般的に早い時期とみる研究者は402年に死去した奈勿麻立干なもつまりかんの墓とみているが[李熙濬イヒジユン 2007]、遅い時期とみる研究者は訥祇麻立干とつぎまりかんの墓で、458年の年代を推定している。概ね5世紀初～中葉とみることができるだろう。出土遺物には、銀冠、金製鳥翼形冠飾、金銅製玉虫裝飾鞍橋、金・銀製容器類と漆器、ガラス容器、金裝飾環頭大刀など3万点を超える。このうち対外交易品である貝製製品が出土しており、皇南大塚北墳から出土した夜光貝杓子は当時の日本との交易品国際貿易関係を確認することができる重要な資料である。しかし、新羅の墓から出土したいくつかの貝に対する研究調査は最近開始した。現在確認されている皇南大塚南墳出土貝製品は60余点ほどで、大部分が損傷した状態である。このうち金銅製貝殻裝飾貝片と登録されている貝製品を確認することができ、一対で出土した貝製裝飾は用途不明と登録され、保管されてきた。調査の結果、金銅製貝殻裝飾具に使用された貝は表面に橙褐色の放射帯、体管(連室細管)、隔壁を特徴として持っているオウムガイ科と確認され、金銅製と金製の一対で製作されたものと推定される。現在、金銅製貝殻裝飾具は縁飾の腐食で連結部分の確認ができず、貝の破損がひどい状態である。しかし有機物の痕跡を確認することができ、金銅製縁飾に付いて残っている貝片と把手背面からは褐色の物質を肉眼で確認することができる。これは過去に貝殻の破損を防ぐ強化処理を行うための方法であったか、貝の裝飾方法のうちの1つであったと考えられる。したがって、本稿は金銅製貝殻裝飾具(金銅製なら

びに金製鸚鵡杯)に対するCTとX線の非破壊調査、およびX線蛍光分析を使用して基礎材料を調査した。また、中国の西晋時代と東晋時代に出土した鸚鵡杯と比較検討することで鸚鵡杯の原形を推定し、過去の文献に出てくる鸚鵡杯と現存する鸚鵡杯を比較した。

II. 鸚鵡杯

1. オウムガイの特徴

オウムガイはオウムガイ科(*Nautilidae*)に属する軟体動物の総称である。学名は *Nautilus pompilius* で、軟体動物門の頭足類で、“生きている化石”と呼ばれる。広い意味のオウムガイ類は古生代カンブリア期前期のオルドビス紀に繁栄してデボン紀に至ったが、その後は徐々に衰退し、三畳紀(トリアス紀)前期以降は今日のオウムガイと似た種類のみが残った。現在はオウムガイ科の6種が残っている⁽¹⁾。過去に絶滅した生物であるアンモナイトはオウムガイと近い種であり、オウムガイ属のうちオウムガイ(*Nautilus pompilus*)は最も一般的な種である。殻径は20cm程度で、殻幅は9cm程度、内側に巻いており、普通の巻貝のような螺層がない。表面は成長脈を除いて滑らかで、複数列の橙褐色の放射状の帯がある。螺層の基部が黒く、オウムの嘴を連想させるのでオウムガイという名が付いた。内部は強い真珠光沢があり、内側にはくぼんだ隔壁が30～35個あって複数の気房に分かれており、隔壁中央

(1 斗山百科 doopedia: <https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=1123849&cid=40942&categoryId=32467>)

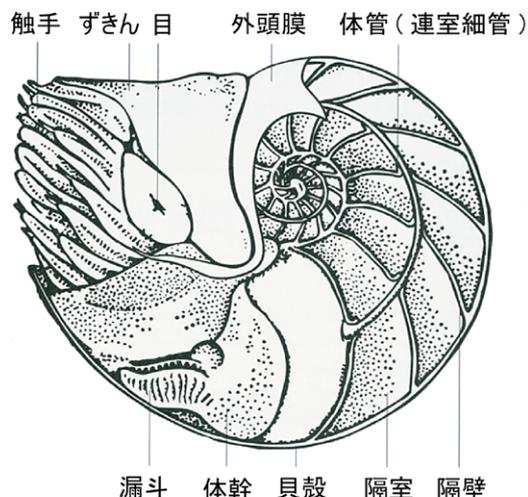


図1 オウムガイの内部構造

の最もくぼんだところに尿管がある。最後の隔壁と殻口部の間が住房で、ここに軟体部が入っている¹²。オウムガイは角膜がない簡単な構造の目を持っており、触手を利用して泳いだり、節足動物のような餌を捕えたりする。オウムガイは向かい合って交尾をし、その際オスの生殖用触手が精包を渡して卵を受精させる。メスが受精した卵を浅い海の岩に産み付けると、それら卵は8～12ヶ月後に直径3cmほどの子で孵化する。オウムガイは最大20年程度生きることが知られている。サモア諸島からフィリピンにいたる太平洋とオーストラリア付近のインド洋に生息し、それは南北緯30°、東経90°～175°の海である。しかし浅い海には生息しておらず、水深約100～150mの浅い場所ではほとんど発見され(2eミュージアム

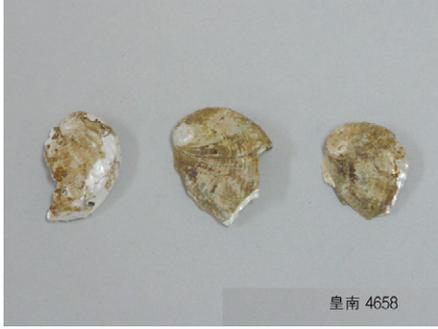
ていない。主に300～350mで多く発見されており、500～700mの場所でもしばしば発見されている[チャンスンクン2013]。

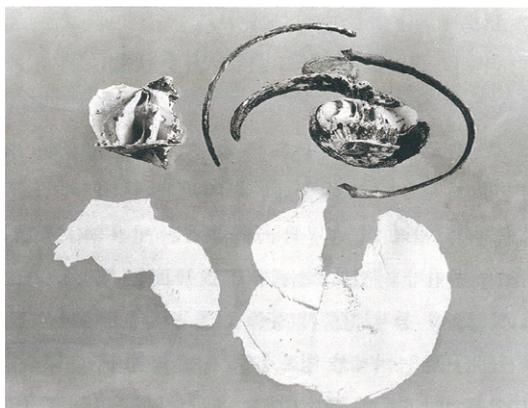
2. 鸚鵡杯の出土資料

皇南大塚南墳から出土した貝殻類は現在60余点ほどが確認されており、完全な形態を保っている貝殻の数は多くない。出土した貝殻の種類には、ハマグリ(*Meretrix lusoria*)、サザエ、イガイ(*Mytilus*)、トコブシ(*Sulculus*)、クボガイ(Tegulinae)、タニシ、カワニナ、ヒトエガイ目(*Umbraculoidea*)、アワビ(*Haliotis*)、ハネナシヨウラク(*Ceratostoma roriflumum*)、チュルムタスルギ^(訳1)などがあり、このほかに種が確認されていない貝もある。

これらの中で唯一、貝の縁を金属で仕上げた製作

表1 皇南大塚南墳で出土した貝殻の種類

| | | |
|---------------|---|--|
| 皇南大塚南墳で出土した貝殻 | ハマグリ | アワビ |
| |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4642</p> |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4656</p> |
| | ヒトエガイ目 | トコブシ |
| |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4654</p> |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4658</p> |
| | サザエ | イガイ |
| |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4648</p> |  <p style="text-align: right; font-size: small;">皇南 4657</p> |



a. 皇南大塚南墳 報告書掲載写真



b. 金銅製貝殻裝飾具片



c. 金銅製貝殻裝飾具片



d. 金製貝殻裝飾具片



e. 金銅製貝殻裝飾具片



f. 金製貝殻裝飾具片



g. 推定される形状



h. 推定される形状

図2 皇南大塚南墳で出土した金銅製貝殻裝飾具片および推定形態

したものに金銅製貝殻装飾具片がある。一対で出土した金銅製貝殻装飾具片は積石部内から出土したが(図2a)、報告書に特に装飾具片についての内容は記述されておらず、貝の種類も確認されなかった。その理由は、発掘されたオウムガイが過去の発掘で出土していない種の貝であり、破損しており形態を確認することが難しかったためと考えられる。

金銅製貝殻装飾具片と類似する出土品は、日本の場合には現在まで発見事例を確認することができないが、中国では発掘出土品を確認することができ、1965年に発掘された東晋王興之夫婦墓[南京市博物館1965]と2015～2016年に発掘された邳州市新河鎮の菜廟村西晋晋家族墓地[南京博物院ほか2018]から一対の鸚鵡杯が出土した。「鸚鵡

の杓 鸚鵡の杯、百年三万六千日、一日須らく傾くべし三百杯」という李白の名詩「襄陽歌」(註2は千年以上世に広く知られてきたが、詩の中の“鸚鵡杯”がどのような器物であるのかは不明で、昔の文献と詩句のみ伝わっていた。中国ですら実物が存在しなかった鸚鵡杯は、1965年に東晋の王興之夫婦墓が発掘されたことにより杯の形が分かるようになった。皇南大塚南墳と北墳出土資料のうち、鏃斗、銅銭、青銅鏡は中国から輸入した品であると報告されて



西晋 邳州市新河鎮菜廟村西晋晋家族墓の出土資料



東晋 王興之夫婦墓の出土資料

図3 中国西晋ならびに東晋時代の鸚鵡杯



図4 鸚鵡杯の出土地ならびに図

表 2 鸚鵡杯の詳細

| 区分 | | 長 (cm) | 幅 (cm) | 高さ (cm) | 耳の長さ (cm) | 耳の幅 (cm) |
|----------|------|--------|------------|------------|-----------|----------|
| 皇南大塚南墳 | 金銅製 | 11 | 8 | 推定 8.5~9.5 | 3.2 | 1.4 |
| | 金製 | 計測不可 | 推定 5.2~5.4 | 計測不可 | 不在 | 不在 |
| 菓廟村西晋家族墓 | 金銅-1 | 15.39 | 7.90 | 12 | — | — |
| | 金銅-2 | 11.78 | 6.9 | 9.2 | — | — |
| 王興之夫婦墓 | | 13.3 | 9.9 | 10.2 | 6.1 | 1.6 |

おり [李漢祥 2010]、これに加えて鸚鵡杯もまた中国との繋がりを示す重要な遺物の 1 つであると考えられる。皇南大塚南墳出土鸚鵡杯は金銅製と金製の一対が出土した。金銅製の縁金具には把手が付いているが、金製の縁金具には把手がない。金銅縁金具の鸚鵡杯は全体の大きさが約 110mm、把手長は 32mm、幅は 80mm である。外部の金銅フレームは 8 ~ 10mm 前後である。破損した状態であり正確な高さは測定できない。しかし、破損残片からみて、およそ 8.5 ~ 9.5cm と推定することができ、残っている貝の厚さは 0.81 ~ 0.93mm である。金製貝殻装飾具片は、貝の損傷が激しく、全体的な形を確認することができないが、破損断面でオウムガイの特徴である隔壁と体管を容易に確認することができる。皇南大塚南墳出土の金銅製貝殻装飾具の全体的

な形態と製作技法は、中国西晋ならびに東晋時代の出土した鸚鵡杯と非常に類似する点を見出すことができるが (図 3)、金製貝殻装飾具については中国で見られない製作方法である。

III. 皇南大塚出土資料に対する調査結果

金銅製貝殻装飾具片に使用された貝は、オウムガイ科で、オウムガイの種は確認できなかった。しかしオウムガイ科が持っている生物学的特徴を確認することができる。オウムガイ科は貝の内部の隔壁と中央を通過して連結している体管 (連結細管) が特徴である (図 5)。最も近い種といえるアンモナイトとは構造が異なっているようにみえるが、内部隔壁の方向が互いに逆であり、体管の位置もオウムガイ科

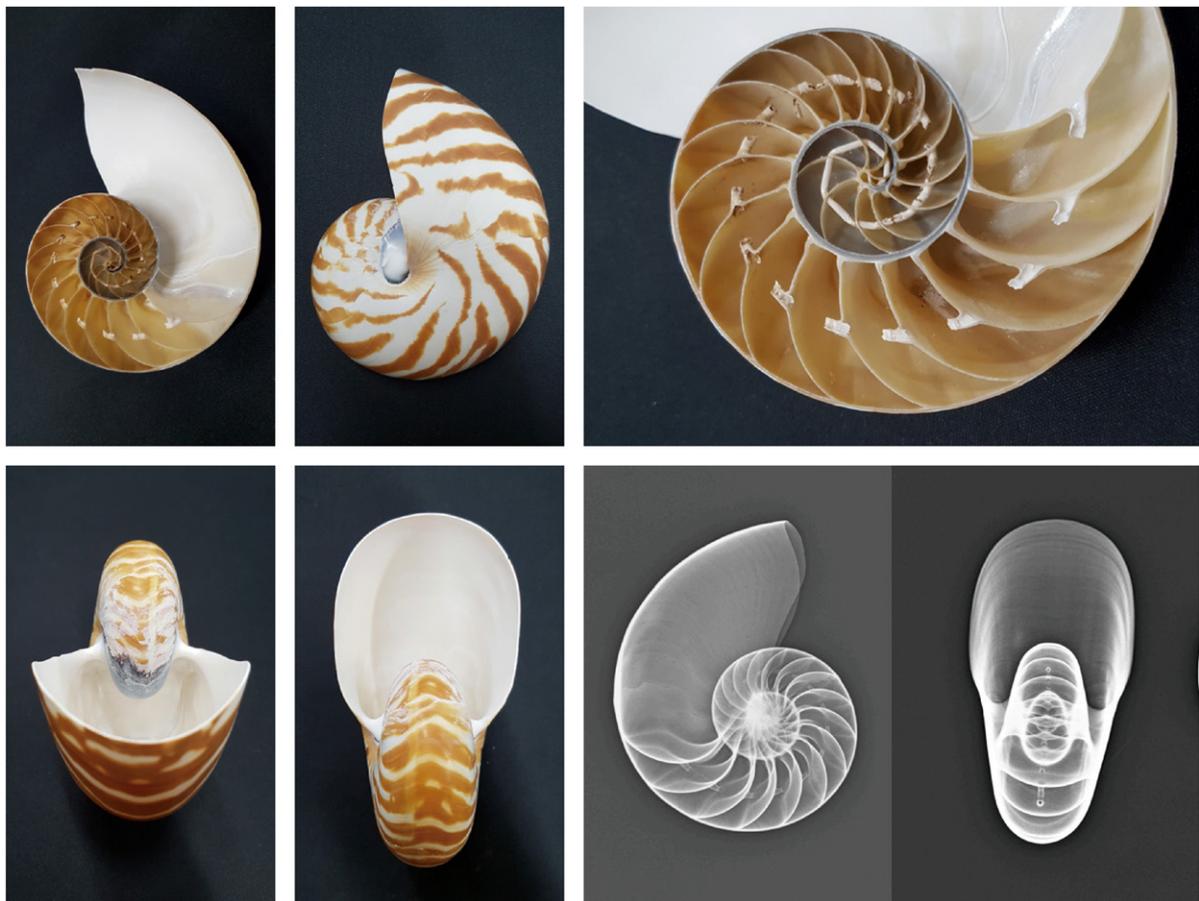


図 5 オウムガイの構造および X 線写真

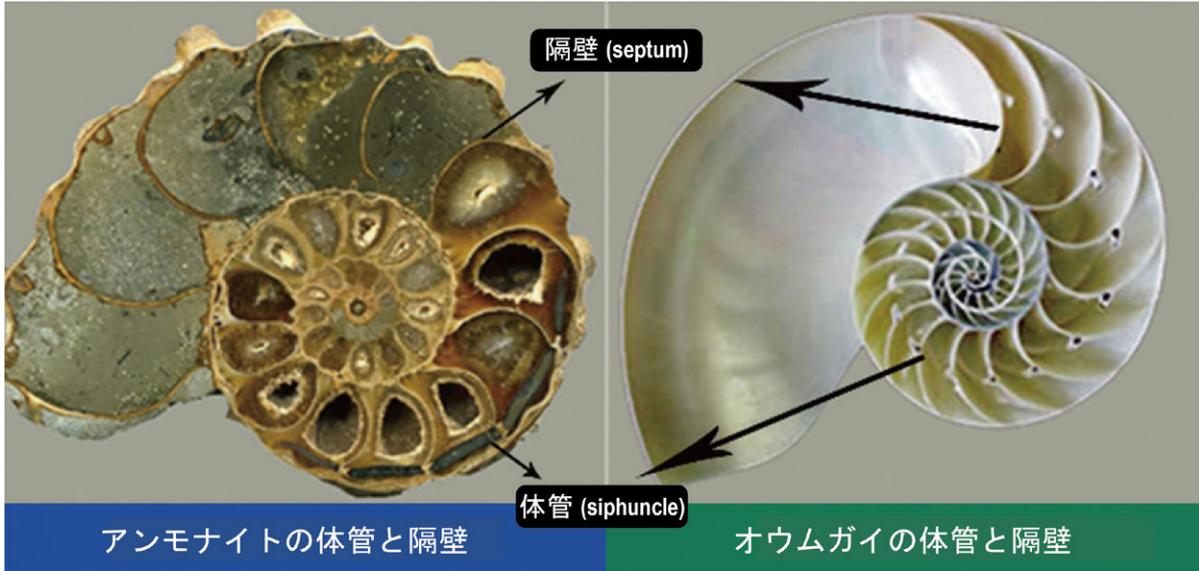


図 6 連室細管（体管）の比較

表 3 皇南大塚南墳で出土した鸚鵡杯の Nano CT および X 線撮影画像

| 区分 | | 皇南大塚南墳より出土した金銅製貝殻装飾具片 | |
|-----------------|-----------------------------------|-----------------------|----|
| | | 金銅製 | 金製 |
| 隔壁 および 体管 | X 線写真 (50kV, 1mA, 60sec) | | |
| | | | |
| | CT | | |
| | | | |

(表 3 つづき)

| 分析機器 | 分析機器名 | 分析条件 | | | | | | | |
|---------|-----------------------|-------|-------|------|-------|------------------|-------------|---------|-------|
| | | 電圧 | 電流 | 回転角度 | 回転単位 | 検出器 | 検出器サイズ | ピクセルサイズ | 断層映像数 |
| Nano CT | FF20CT, Yxlon Germany | 165kV | 7.0μA | 360° | 0.25° | 1792 × 2176pixel | 249 × 302mm | 139μA | 1440 |

は内部の真ん中、アンモナイトは内部外郭よりに位置している (図 6)。

金銅製貝殻装飾具片の成分分析のために、装飾品表面に対する X 線蛍光分析を実施した。分析条件は表 4 のとおりである。

分析は装飾品表面腐食層に対する非破壊成分分析の結果であるため、素地面の成分 (含有量 wt%)

とは差異がある場合がある。成分分析の結果は表 5 にまとめた。

金製装飾具を包む金板は金 (Au) の含有量が 87wt% 以上で、純度は約 21K と推定される。金銅製装飾具は主成分が銅 (Cu) で、金 (Au) と水銀 (Hg) が共に検出されたことからみて、銅に水銀アマルガム金鍍金をしたものと推定される。

表 4 分析機器および条件

| 分析機器 | 分析機器名 | 分析条件 | | | |
|----------|--|------|-------|--------|--------|
| | | 電圧 | 電流 | 時間 | コリメーター |
| X 線蛍光分析器 | μXRF Spectrometer ARTAX, Bruker Nano GmbH, Germany | 50kV | 600μA | 200sec | 0.65mm |

表 5 金銅製貝殻装飾具片の金属縁金具に対する成分分析

| 分析位置 | 分析位置 | 成分組成 (wt%) | | | | | | | | | | | 材質 | |
|---|--------|------------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|----------------|
| | | Mn | Fe | Ni | Cu | Zn | As | Ag | Sn | Sb | Au | Hg | | Pb |
|  | 1 | - | - | - | 0.46 | - | - | 11.58 | - | - | 87.96 | - | - | 21.1K |
| | 2 | - | - | - | 0.36 | - | - | 11.57 | - | - | 88.06 | - | - | 21.1K |
| | 3 | - | - | - | 0.30 | - | - | 11.20 | - | - | 88.50 | - | - | 21.1K |
|  | 6(鍍金) | 0.00 | 0.02 | 0.02 | 61.58 | 0.01 | 0.00 | 0.73 | 0.08 | 0.31 | 30.99 | 6.18 | 0.09 | 銅に水銀アマルガムした金鍍金 |
| | 7(素地) | 0.00 | 0.01 | 0.05 | 98.23 | 0.01 | 0.16 | 0.20 | 0.10 | 0.27 | 0.31 | 0.19 | 0.47 | |
| | 8(鍍金) | 0.00 | 0.02 | 0.00 | 49.33 | 0.00 | 0.00 | 0.96 | 0.06 | 0.22 | 40.97 | 8.43 | 0.00 | |
| | 9(素地) | 0.00 | 0.02 | 0.00 | 98.86 | 0.01 | 0.01 | 0.32 | 0.05 | 0.12 | 0.49 | 0.12 | 0.00 | |
| | 10(鍍金) | 0.00 | 0.02 | 0.00 | 63.43 | 0.01 | 0.00 | 0.83 | 0.04 | 0.22 | 29.65 | 5.73 | 0.08 | |
| | 11(素地) | 0.00 | 2.27 | 0.01 | 94.35 | 0.01 | 0.48 | 0.34 | 0.05 | 0.15 | 0.97 | 0.30 | 1.07 | |



金製装飾具



金銅製装飾具



図7 金銅製縁金具の褐色有機物の細部写真

金銅製貝殻装飾具の金属フレーム部分に残っている貝周辺で褐色の有機物を肉眼で確認することができ、把手背面からも同様の色調の漆塗にみえる有機物の痕跡を確認することができる(図7)。したがって、有機物に対するさらなる分析を通して明確な確認作業が必要である。貝表面に使用されたと判断される有機物の使用目的は、大いに新羅蚤の装飾性、貝の耐久性強化、金属フレーム装着方法などで使用した可能性がある。しかし中国西晋の出土鸚鵡杯では貝表面に金銅製フレームのみを装着して製作している点からみて、有機物の使用は接着剤としての役割ではないだろう。したがって表面に使用された有機物は新羅のみの特徴的な製作方法であるか、鸚鵡杯の耐久性強化を目的としたものと考えられる。しかし、この問題は有機物に対する追加的分析調査の後に判断する必要がある。

IV. 文献に登場する鸚鵡杯

鸚鵡杯についての資料は、『高麗史』、『燃藜室記述』、『新增東国輿地勝覽』、『翰林別曲』、『朝鮮王朝実録』およびいくつかの文集と歴史書に「鸚鵡杯」として登場する。鸚鵡杯は非常に貴重なもので、『朝鮮王朝実録』世宗実録 24 卷、世宗 7 年 5 月 13 日 壬子の最初の記事「壬子 / 左贊成黄守身啓 “ 牙山官奴禾萬訴臣於司憲府、所言皆非臣之所爲也。然憲府

方効、請避嫌。” 傳曰 “ 何可避也 ? ” 遂引見于交泰殿、都承旨金從舜入侍設酌。前濟州按撫使元志於進本州所産角觥鸚鵡杯、分賜内宗親及守身、從舜。」、睿宗元年 2 月 24 日己酉の 3 番目の記事「賜宮醞及鸚鵡杯于承政院曰 “ 卿等須盡醉。飲罷、以此杯付與院相韓明滄。」、『燕山君日記』 54 卷 燕山 10 年 6 月 21 日の 4 番目の記事「傳曰 “ 葵花盃一千、鸚鵡盃一百燔造。”」などにみられるように、王が宗親や臣下に下賜する貴重なもので、王が鸚鵡杯の製作を直接指示したことも確認することができる。また、成宗実録 113 卷成宗 11 年正月 24 日乙巳の最初の記事「乙巳 / 受常参視事。僉知中樞府事高台弼進曰 : “ 臣濟州人也、深知濟州民弊、不敢不達。 “ 上問 : “ 何事 ? ” 對曰 : “ 本州進眞珠、鸚鵡盃、其弊不貲、請減之。 “ 又請置驛。上謂承旨曰 : “ 眞珠與鸚鵡盃、無益國用、而弊及於民、其鑄之、置驛便否、令該曹議啓。”」をみると、鸚鵡杯が濟州地方特産の進上物で、オウムガイの貢納が容易ではなく、濟州牧使・高台弼が百姓らの困難と減免を請う内容である。実録以外の記録でも見ることができ、朝鮮時代中期の冷窩公・安景漸 (1722~1789 年) の『遊金剛録』では、「僧侶が朝あしたに寺にある古物を見せてくれ、鸚鵡盃、琉璃臺、琥珀盞があり、それらは朝鮮世祖の内賜物であった」^(訳 3) という記録も確認される。さらに朝鮮時代中期の『新增東国輿地勝覽』第 29 卷、朝鮮時代の学者である李尚質 (1597~1635 年) の『家州集』 卷 3

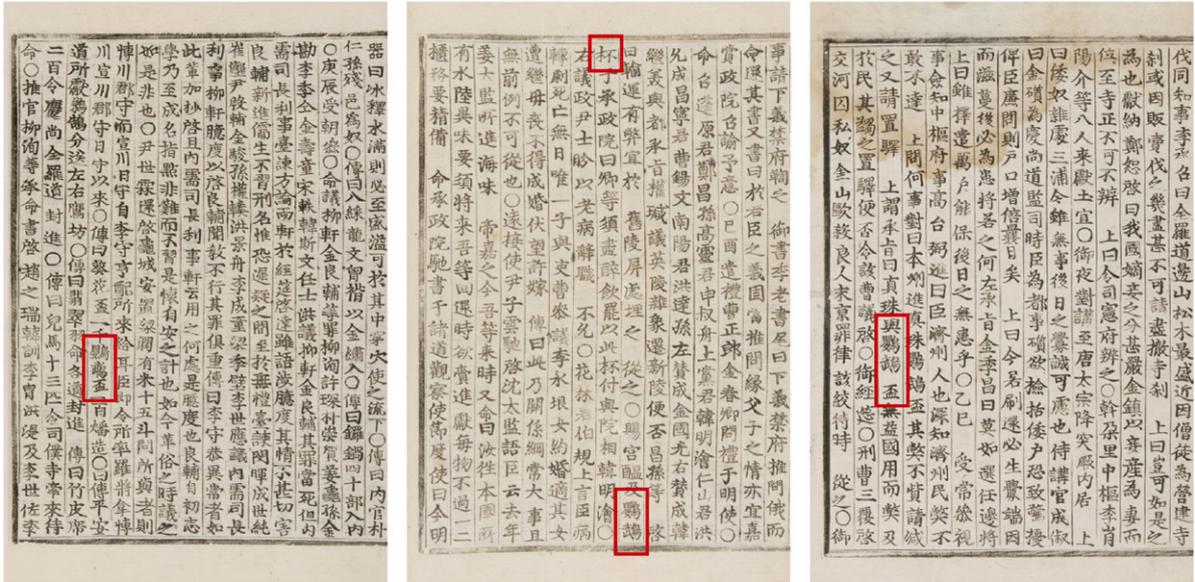


図 8 『朝鮮王朝実録』

七言古詩、朝鮮時代中期の学者である金中清の詩文集『苟全集』でも鸚鵡杯が登場する。

現存する鸚鵡杯は、朝鮮中期(宣祖 20 年)の文人裴三益(1534~1588 年)が明国に使した時に明の神宗から贈られた鸚鵡杯(図 9a)⁶⁾と朝鮮中期の文人である朴守良(1491~1554 年)が明宗から下賜されたものであると伝わる鸚鵡杯(図 9b)があり、朝鮮時代に製作されたものに烏竹軒市立博物館に展示されている鸚鵡杯(図 9c)がある。しかし過去発掘されたオウムガイで作られた鸚鵡杯とは形態および貝の種類に違いがみられる。このような点から、鸚鵡杯が時代と環境によって貝の種類と形態が変化したことを確認することができる。

V. おわりに

本稿では韓半島および中国で出土した鸚鵡杯を比較し、韓国の文献記録と伝世鸚鵡杯について検討した。これにより、鸚鵡杯は非常に貴重な文化遺産であることが分かった。これまでに確認してきた結果をまとめると次のようになる。

第一に、皇南大塚南墳で出土した金銅製貝殻裝飾具製作に使用された貝は、表面の橙褐色放射帯、隔壁および体管(連室細管)などの生物学的特徴を示しているので、オウムガイ科の貝である。

第二に、鸚鵡杯は当時の新羅の国際関係を確認することができる遺物で、中国との貿易関係を知ることができる重要な資料であり、王陵級の墓から出土

した最上位階層だけのための非常に重要な遺物である。

第三に、中国交易品をそのまま使用せず、新羅のみの異なる製作方法で再加工した。中国西晋および東晋時代の鸚鵡杯と皇南大塚南墳から出土した金銅製縁飾の鸚鵡杯は、縁飾の製作方法が似ている。鸚鵡杯の製作は、①中国から完成した完成品を輸入した場合、②半製品(表面の有機物を除く)のオウムガイを輸入し、新羅で製作した場合、③オウムガイのみを輸入し、新羅で製作した場合が推測される。また、皇南大塚南墳から出土した鸚鵡杯は金銅製縁飾と共に大きさや形態が異なる金製縁飾という 2 点が製作されており、貝表面に仕上げとして漆塗りと推定される有機物を使用している点を見ると、中国で出土した鸚鵡杯との差異性を確認することができる。この違いは、中国との交易品である鸚鵡杯を新羅のみの方法で再加工し、新羅特有の特徴で製作されたのだろう。

今回の皇南大塚南墳から出土した鸚鵡杯の基礎調査は、貝の特徴、中国出土事例との比較、遺物の用途を確認しただけであるので、追加的な研究調査を通してオウムガイの種の確認、金属製フレームの製作および製作(結合)方法、貝表面の有機物の分析と比較調査など、さらなる調査を実施することで鸚鵡杯の正確な情報を確保する必要がある。

訳註:

訳 1) チュルムタスルギはカワニナ(다슬기)の一種。

訳 2) 李白 『襄陽歌』

落日欲沒硯山西 落日沒せんと欲す 硯山の西
 倒著接離花下迷 倒まに接離を著けて花下に迷う
 襄陽小兒齊拍手 襄陽の小兒 齊しく手を拍ち
 攔街爭唱白銅鞮 街を攔って争い唱う 白銅鞮
 傍人借問笑何事 傍人借問す 何事をか笑ふと
 笑殺山翁醉似泥 笑殺す 山翁酔うて泥に似たるを
 鸚鵡杓 鸚鵡杯 鸚鵡の杓 鸚鵡の杯
 百年三萬六千日 百年 三萬六千日
 一日須傾三百杯 一日 須らく三百杯を傾くべし
 遙看漢水鴨頭綠 遙かに見る 漢水の鴨頭の綠
 恰似葡萄初醞醅 恰かも似たり 葡萄の初めて醞を醞するに
 此江若變作春酒 此の江 若し變じて春酒と作らば
 壘麴便築糟丘臺 壘麴もて便ち築かん 糟丘臺
 千金駿馬換小妾 千金の駿馬は小妾に換え
 笑坐雕鞍歌落梅 笑って雕鞍に坐して落梅を歌わん
 車傍側挂一壺酒 車傍 側らに挂く一壺の酒
 鳳笙龍管行相催 鳳笙 龍管 行くゆく相催す
 咸陽市中歎黃犬 咸陽の市中に黄犬を歎くは
 何如月下傾金盞 何ぞ如かん 月下に金盞を傾くるに
 龜頭剝落生莓苔 龜頭剝落して莓苔を生ず
 淚亦不能為之墮 涙も亦た之れが為に墮つる能わず
 心亦不能為之哀 心も亦た之れが為に哀しむ能わず

訳 3) 「二十九日、晴。僧朝示寺中古物、即鸚鵡盃、琉璃臺、琥珀盞、而此則光陵內賜物也。」

訳 4) 「図 9 朝鮮時代の鸚鵡杯」については、本翻訳では掲載していない。3 点の資料の写真が掲載されているので、下記公開先から原載論文をダウンロードして確認していただきたい。キャプションについては、左から a. 儒教文化博物館 (興海裴氏臨淵齋宗宅寄託品)、b. 朴守良宗家保管物、c. 烏竹軒市立博物館展示品。

参考・引用文献 (出版年順) :

南京市博物館 1965 「南京人台山東晋王興之夫婦墓発掘報告」『文物』1965-6.
 文化財管理局文化財研究所 1993 『皇南大塚南墳発掘調査報告書』
 江介也 2002 「第 3 節 西寧市青海省磚瓦廠墓の基礎的考察—東晋十六国期における広域文化動態—」『中国青海省におけるシルクロードの研究』(シルクロード学 14) シルクロード学 研究センター :254-277.
 大広 [編]2005 『中国・美の十字路展』 印象社.

李熙濬 2007 『新羅考古学研究』社会評論 [이희준 『신라고고학연구』 사회평론]

李漢祥 2010 「新羅古墳に属する外来文物の調査と研究」『中央考古研究』第 6 号, 中央文化財研究院 :62-83. [이한상 「신라고분 속 외래문물의 조사와 연구」 『중앙고고연구』 제 6 호, 중앙문화재연구원]

チャンスンクン 2013 「古代の海洋生物」『海洋生物の世界』(第 2 版) 韓国海洋科学資源院. [장수근 「고대의 해양생물」 『해양생물의 세계』(2 판) 한국해양과학기술원]

国家文物局 2017 『2016 中国重要考古发现』 文物出版社.

南京博物院・徐州博物館・邳州市博物館 2018 「江蘇邳州煎菓廟西晋墓地 M1 発掘簡報」『東南文化』2018-2.

図版出典 :

図 1 : 註 1 記載 図 2 : a. 文化財管理局文化財研究所 1993 p.46 挿図 46; b-h. 著者 図 3 : 上左. 国家文物局 2017 p.108 上右; 上右. 南京博物院ほか 2018 彩挿 4-1; 下左. 大広 2005 図 30; 下右. 南京博物院 図 4 : 地図は google earth、実測図は 1. 南京博物院ほか 2018 p.27 図 14-5,6; 2. 江介也 2002 p.266 図 8 ②; 3. 著者 図 5 : 韓国水産資源公団 <https://blog.naver.com/fira-sea/221076626239> 図 6,7 : 著者 図 8 : 国史編纂委員会韓国史データベース 『朝鮮王朝実録』 <http://sillok.history.go.kr/main/main.do> 図 9 : 再掲なし 表 1 写真 : 著者 表 3 写真 : 著者 表 5 写真 : 著者

原載 :

김중우 2019 「경주황남대총 남분 출토 신라 앵무배」 『박물관보존과학』 제 22 집 국립중앙박물관. [金鍾佑 「本稿同題」 『博物館保存科学』 22 輯 国立中央博物館]

公開先 :

<https://doi.org/10.22790/conservation.2019.22.0001>

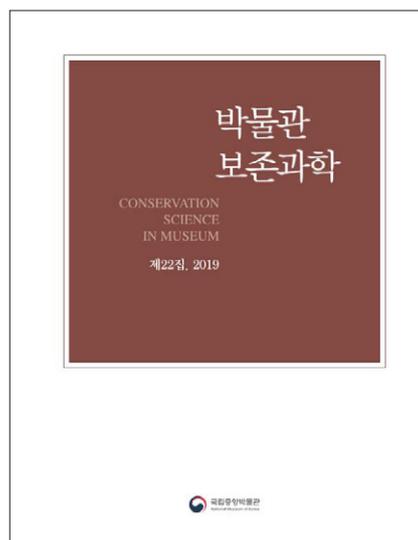
Abstract:

The excavation of the south mound of *HwangNamDae-Chong* tomb 皇南大塚 in Gyeongju has yielded diverse types of shell artifacts. Among the them, this paper

investigated fragments of shell ornaments with gilt-bronze frames, the use of which has not been identified. It was revealed that the artifacts are in fact nautilus cups, which had never been found previously in excavations in Korea. A nautilus is a species marine mollusk known to be the closest to prehistoric ammonites. It has brown stripes on the surface of the shell and septa inside, and a siphuncle penetrating to the center of the septa. It is known that nautilus cups were made and used in China, but only three examples have thus far been identified. These surviving cups have metal ornaments and are dated to the Western and Eastern Jin periods of China. No nautilus cups have been found in Japan, and the shell ornaments investigated in this study were determined to be the first nautilus cups ever found in Korea. Nautilus cups are mentioned in ancient documents and literature, including in poems by the Tang dynasty poet LI Bai 李白 and in Joseon-period documents. This paper presents the biological characteristics of nautilus, cases of excavation of nautilus cups outside Korea, and findings from

the basic research of the nautilus cup from HwangNam-DaeChong tomb.

Keywords: HwangNamDaeChong Tomb, Nautilus, CT scanning, Bronze, Gilding



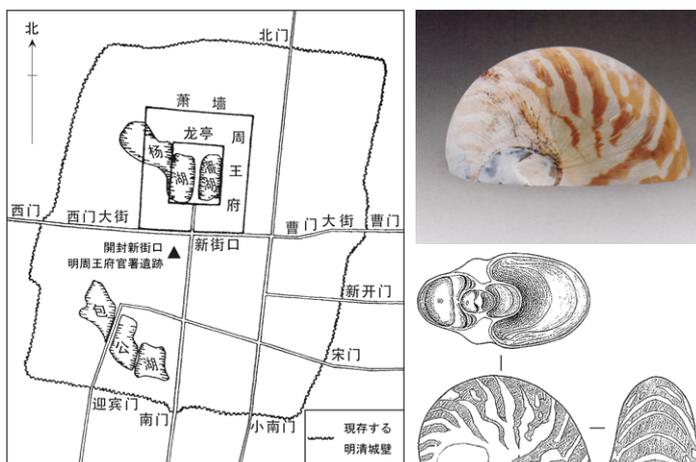
翻訳後記

このたび、上掲のとおり^{キム ジョンウ}金鍾佑先生の論考を訳出させていただいた。『皇南大塚南墳発掘調査報告書』において用途不明として報告されていた金具と貝片が鸚鵡杯であるという研究成果も驚きであったが、加えて後の朝鮮時代にも鸚鵡杯の語とその資料が存在することを指摘し、資料を集成している点が注目される。

中国・江南の西晋ならびに東晋期の墓から出土した鸚鵡杯については同時期の南海交易に関連する奢侈品として注目が集まっているが、後の時代の出土資料についてはあまり関心が払われていないのではないだろうか。

中国においてもが後の時代の鸚鵡貝の出土事例がないわけではない。資料は、現在の河南省開封市、明代には周王府の官衙があったとされる王府外西南にあたる場所で発見された明代邸宅址で出土した[開封市文物考古研究所 2017「河

南開封新街口明周王府官署遺址発掘簡報』『文物』2017-3: 39-72]。鸚鵡杯が出土したのは邸宅のJZ9西耳房である。同建物の基壇上では、漆卓子、椅子、箱物、筆や硯の文房具といった豊富な遺物が出土したという。鑑賞用の文物も相伴しているとのことなので、「杯」で良いのかは不明であるが、注目される出土資料である。(訳者)



明・周王府官署遺跡の位置と西耳房から出土した鸚鵡杯